



Hiroshima Satoyama Good Award Official Guide Book

ひろしま里山グッドアワード
公式ガイドブック（令和4年度版）

里山・里海での
活動をさらに
広めていきたい
あなたへ

P02 ひろしま里山グッドアワードのしくみ
P04 令和4年度授賞式の様子
P05 令和4年度受賞団体紹介
P26 令和3年度受賞団体のその後





広島の里山・里海には、
中山間地域と言われるエリアが広がっています。

そこには、さまざまな課題と向き合いながら
地域を元気にするべく立ち上がり
ひたむきに活動を続ける人たちがいます。

熱意ある取り組みによって生まれる
“地域の新しい価値”を
あなたも一緒に感じてみてください。



評価項目

独創性

地域にある資源（物産品、自然、人、歴史・文化等）を活かしているか。また、資源を活かすアイデアや仕組みを作り出す発想が独創的であるか。

課題解決

地域の活力となるような新たな価値を生み出しており、地域の実情に即した課題の解決につながるものとなっているか。

持続性

一過性の取組ではなく、取組を継続していくために人材や財源の確保などの工夫をしているか。また、地域内外の人や団体と連携した取組となっているか。

波及性

他の地域や団体のモデルとなるようなアイデアや仕組みが盛り込まれているか。

投票促進の活動

「ひろしま里山グッドアワード」の一般投票審査では、WEB ページ上で各団体の活動紹介を行い、一般の方1名につき2団体へ投票していただきます。各団体がさまざまな手法で、自身の活動PRを毎年実施しています。SNSの活用やチラシの設置だけでなく、これまで関わった方へお礼状とともに投票を依頼したり、地域内で実施される祭での挨拶まわり、休日に高速道路PAでのPRなど、各団体が工夫して投票促進を行なっています。一般投票を通じて、チームの結束力を高め、地域内外での共感者と繋がるきっかけになっています。



令和4年度の結果

今年度は総勢約3,900名が一般投票で参加しました！

令和4年度は、5団体が一次審査を通過し、10月6日から11月30日まで、一般投票に臨みました。それぞれが、日頃から応援してくれている周囲の方への声かけなどを積極的に行い、今年も大接戦となりました。投票の際に寄せられた応援コメントには、活動の未来に期待しているなどの声が多くあり、応援者の熱意も感じられました。ご投票いただいたみなさま、ありがとうございました！

【一次審査通過団体】※エントリー順

- ・一般社団法人まなびのみなど
- ・株式会社リビングファーム広島
- ・安田マルシェ
- ・中国四国里山整備振興会
- ・一般社団法人地域 QOL 研究所



ひろしま里山グッドアワードとは？



広島県の中山間地域にあるものを生かし、新しい価値の創造につなげていく優れた取組を表彰し、そのプロセスやノウハウを共有することによって取組のさらなる普及促進をはかるというものです。具体的な流れは以下の通りです。

令和4年度グッドアワードの流れ

02 一次審査

応募があった各プランの資料をもとに審査会を開催。アドバイザーの意見を参考にしながら、広島県が5件を選定。

01 取組募集

1ヶ月～1ヶ月半ほどの期間を設けて魅力的な取組を公募。公募方法は、各活動実践者がプランに関する情報を専用フォーマットに記載してエントリー。

04 授賞式

一般投票の得票数をもとに、広島県が「さとやま未来大賞」と「未来のたね賞」を決定。授賞式では、知事から賞状の授与や意見交換会などを実施。

03 一般投票

一次審査を通過した取組が、公式ホームページ上で公開されたあと一般投票。パソコン、モバイル、タブレットから1人につき2団体まで投票。

審査員の紹介



藻谷 浩介
株式会社日本総合研究所
主席研究員



新里 カオリ
立花テキスタイル研究所
所長



新條 隼人
株式会社ドットライフ
代表取締役

令和4年度 受賞団体紹介

令和4年度の受賞5団体を紹介します。それぞれに想いのこもった活動です。詳細や活動風景をぜひご覧ください。



01

リビングファーム広島



02

まなびのみなど



03

安田マルシェ



04

中国四国里山整備振興会



05

地域 QOL 研究所



令和4年度 ひろしま里山グッドアワード 授賞式の様子

令和4年度の授賞式は、令和4年12月10日に行われました。今回は、令和3年度に〈さとやま未来大賞〉を受賞した「100プロ」の活動拠点である、北広島町立新庄小学校が会場となりました。



各団体の皆さん、おめでとうございます！



【湯崎知事よりコメント】



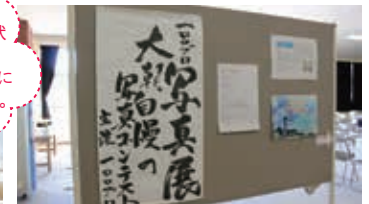
中山間地域の課題を乗り越えていくためには、地域の人の力や資源を総動員していく必要があります。地域にあるものを上手く活用し、資産を生みだそうとされる受賞者の皆さんの取組の輪の、さらなる広がりを期待しています。

授賞式&湯崎知事との懇談で各団体のモチベーションもアップ

今年度の〈さとやま未来大賞〉は、合計2,033票を獲得した“安芸高田発 国内最大規模の竹チップ堆肥センターで里山資源活用”の取組を行う「株式会社リビングファーム広島」が受賞。授賞式では、湯崎英彦広島県知事から各団体の代表者に表彰状とトロフィーが手渡されました。また知事との座談会で意見交換も行い、今後の活動のモチベーションも高まった様子でした。



活動の現状や展開について熱心に話しました。



関係者が応援に駆けつけている団体もあり、熱量の高さが伺えました。また、会場では「100プロ」による写真展示も行われ、今年度の団体との交流も生まれる良い機会となっていました。

令和4年度
受賞団体紹介



01



リビングファーム広島

【メンバー】

代表取締役社長 山本昭利さん
代表取締役 浅野英徳さん
専務 矢木仁さん

ほか4名

安芸高田発 国内最大の
竹チップ堆肥センターで
里山資源活用

さとやま
未来大賞

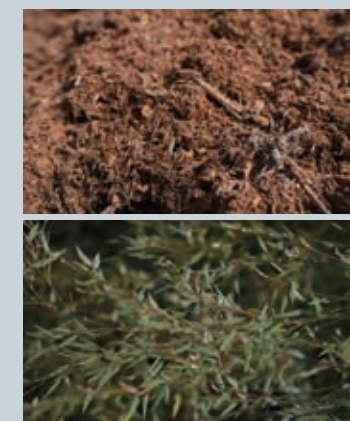
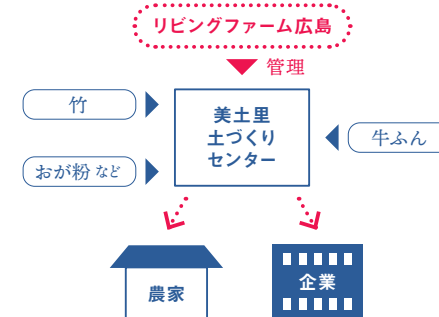


株式会社リビングファーム広島 安芸高田市

【団体プロフィール】

安芸高田市にある「美土里土づくりセンター」の管理を、2020年から受託。年間1500トン以上の堆肥生産を行える施設で、竹や木質をふんだんに入れた牛糞堆肥を生産している。

リビングファーム広島関係図



国内でも稀な大規模堆肥センターで
微生物の力を借りた有機堆肥作り

ここ「美土里土づくりセンター」は、40年以上続く堆肥センターです。地元の酪農家さんたちの牛糞処理施設としても機能しており、持ち込まれた牛糞を活用して堆肥に変えるのがこの施設の主な仕事です。堆肥にしたものは、農家のお客様にはトン単位で販売しているほか、小袋での販売、田畑への散布なども請け負っております。

2020年に、前任の事業者から引き継いでこのセンターの管理が始まりました。その際、弊社の専務である矢木が元々林業に従



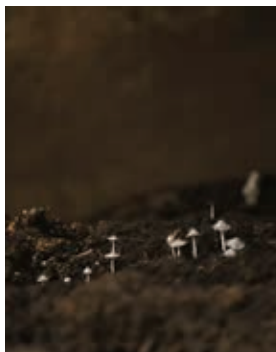
写真奥／「竹取物語 かぐや姫 竹チップ20%配合リッチタイプ」、写真手前／「竹取物語 翁 竹チップ3%配合 40L」安芸高田市内の道の駅や、ネット通販にて入手できる。

事していた経験を生かして、地域の竹林の整備を始めました。そのときに出る端材をチップ化し、堆肥に混ぜ込んだものを約半年間かけて発酵させています。これらが混ざることにより、乳酸菌の力で土を育てることができ、微生物が住んでくれる土になる、これが我々の堆肥の特徴です。竹の他にもおが粉やパークなども混ぜ込んでおり、その素材のほとんどが安芸高田市内から集まってきました。普段ならゴミになる廃棄物たちを加工することで、有機堆肥に生まれ変わり、お米や野菜の味を良くすることに役立っているのです。実際にこの堆肥を米作りで活用した農家さんからは、米の食味がアップしたとの声も寄せられているので、これからさらにさまざまな方に使っていただきたいと思っております。

これまでこの土づくりセンターでは、散布用と言って軽トラなどで購入者が取りに来て、堆肥をそのまま荷台に積み、田畑へ持ち帰って散布するというものしか製造していませんでした。そこで私たちは、経済産業省が支援する「ものづくり補助金」を活用して小袋に詰める機材などを購入。この機材の導入により、堆肥を小袋で販売することも可能になりました。



左／堆肥は80度ほどまで温度が上がり、雑草の種が死滅する。その後65度前後で管理し、有用な微生物を増やす。中／竹やおが粉などの副資材。右上／センターで働く矢木さん。右下／散布用の堆肥は大きな袋で納品する。



微生物の住む土は、有機堆肥として農作物をおいしくするだけでなく、これからさまざまな用途で活用されていく予定。

カプトムシが好んで集まる土で竹チップ堆肥の用途を拡大するべく現在取り組んでいるのは、さまざまな企業と共にこの堆肥を使った事業展開をすることです。一つ目の例として、カプトムシの養殖などを手がける企業との業務提携があります。

カプトムシというと、夏に山で採集する昆虫というイメージかもしれませんが、なぜそんなカプトムシを養殖するのか。実は近年国内では観賞用のカプトムシが人気で、高品質で希少価値の高い成虫は高額で売買されています。また、カプトムシを動物の飼料として活用するという研究もされるほど、注目され、

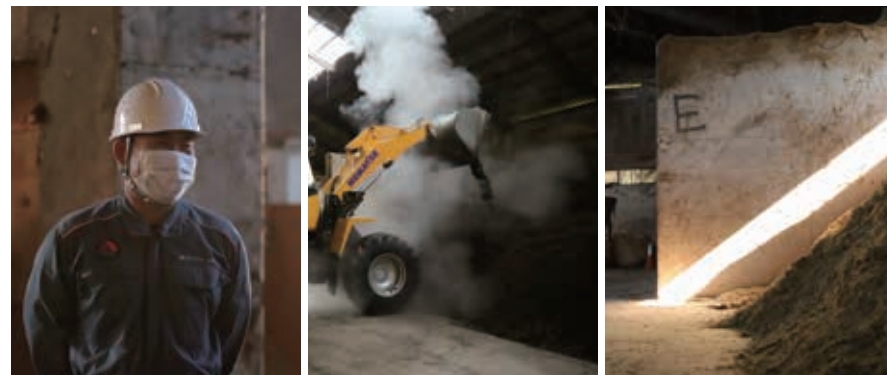
カプトムシが好んで集まる土で竹チップ堆肥の用途拡大を図る

需要が高まっているのです。

そんなカプトムシの養殖に必要なのは、良質な土です。私たちの竹チップ堆肥を、研究用に活用していただいたところ、カプトムシが好むとても品質のよい土だと評価されました。今後は、養殖用の土の開発も進めていきたいと考えています。

二つ目の例として、野菜の栽培においてある企業と協力し、新しい農法に挑戦しています。これは、従来の農業のように土と水を多く使うのではなく、膜に水を浸透させ、その下に2センチほどの培地(土)を敷いてトマトなどの野菜を栽培する方法です。水・エネルギー・廃棄物が少なくて済むため、SDGs が叫ばれる昨今の新しい農業の形として注目されています。私たちの堆肥で、有機野菜を栽培し、土を活用して「食」の分野も始めようと考えています。

これから食糧危機の問題はますます現実味をおびてくるでしょう。これは、農業用の肥料を輸入に頼り、真の自給自足に至っていないからではないかと考えています。そんな状況下で、食べ物やエネルギーを自分で作り出すために、私たちが丹精込めて作っているこの堆肥が役に立つことを信じています。



左/センター長の吉山さんは、堆肥の製造管理を行っている。右・中/堆肥は、時おりショベルカーで天地を返したり場所を移動させながら、さらに発酵を促進する。

偶然の出会いからはじまった「土」ベンチャー企業の挑戦

偶然つながった縁により、安芸高田市で農業に関わる事業を起こすことになったのが、この「土」ベンチャー企業です。代表の浅野は以前、広島市内の出版社に勤務しておりました。そこでお世話になった企業の社長さんからの紹介で、共同代表の山本や専務の矢木とも出会いました。弊社は、最初は営農型の太陽光発電事業を行う会社として始まりましたが、以前から山本は、この安芸高田市を有機農業の里にしたいとの構想を持っており、ある時、この堆肥センターの受託管理をしようという話が持ち上がりました。

安芸高田市は、立地的に中国地方のへそに位置します。そのため、山陰・山陽どちらへも交通の便がよく、「ものを出荷する」にも「ものを入荷する」にも適した場所と言えると思います。あの毛利元就が中国地方を制覇できたのは、こうした理由もあるのかもしれませんが、そんな地の利に優れた場所ですが、獣害避けの柵がいたるところに設置されていて、今では「柵の中に人間が住んでいる町」とも言われるほど。人口減少も深刻な課題であり、



左から代表取締役の浅野さん、代表取締役の山本さん、専務取締役の矢木さん。3人それぞれの得意分野や持ち味を生かして事業を運営している。

それとともに耕作放棄地や手付かずの竹林なども問題になってきます。

私たちが放置竹林の伐採を始めると、その話が口コミで地域に広がり始めました。地域の人たちは「自分の竹藪の整備をどうしよう」と悩んでいても、なかなか相談できる人がおらず、結局放置することが多いです。竹藪は土砂災害にも弱いいため放置し続けるのは危険ですので、一気に切るのではなくまずは間伐をしていきます。そしてゆくゆくは斜面など危険な場所の竹藪を無くし、平地の耕作放棄地で竹を栽培し、計画的に間伐する管理竹林にする予定です。

リーダーの浅野さんからひとこと

この取組をきっかけに活動を表すキーワードも誕生



「土」ベンチャーという言葉は、活動への共感を生み投票に繋げることを考えた末にできた大切なキーワードです。大賞受賞を機にさらに事業を成長させて参ります。

リビングファーム広島のお問い合わせ先・SNS

【株式会社リビングファーム広島】

住所：安芸高田市吉田町下入江 1496

TEL：0826-43-1532



Twitter

令和4年度
受賞団体紹介



02



【メンバー】

代表理事 取釜 宏行さん
代表理事 牧内 和隆さん
ほか 12名

“やっぱり地域で育てたい”
大崎海星高校魅力化
プロジェクトの進化

未来の
たね賞

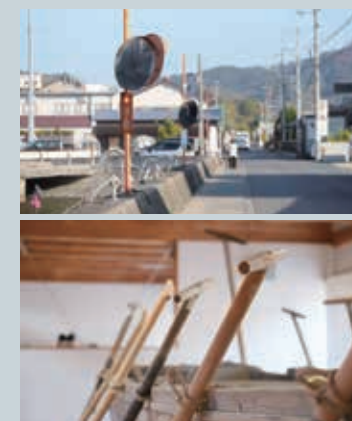
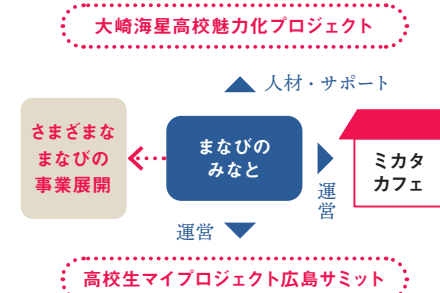


一般社団法人まなびのみなと 豊田郡大崎上島町

【団体プロフィール】

2019年設立。「誰もが学びに出会う日常を」をビジョンにかけ、大崎上島を拠点に地域と協働した子どものキャリア教育や学習支援などを行う。

まなびのみなと関係図



左上・中/ミカタカフェ店内では、高校生が考案したメニューを楽しむこともできる。左下/大崎海星高校のプロジェクトについて紹介された本もミカタカフェにて販売中。右/カフェは昔からあったパン屋さんを改装して2021年にオープンした。

地域をあげて乗り越えてきた
島唯一の県立高校の廃校危機

私たち、一般社団法人まなびのみなとは、「大崎海星高校魅力化プロジェクト」の取組から発展してきた団体です。「学びの場づくり」と「学びきつかけづくり」という大きな2つの軸で、さまざまな取組を行っています。まず、「大崎海星高校魅力化プロジェクト」についてです。この取組は平成26年に、広島県教育委員会の方針として打ち出された「今後の県立高校の在り方に係る基本計画」を機にスタートしました。その方針とは、平成29年・30年の2年連続で全校生徒が80名未満になった場合、高校の統廃合を検討していくというものです。このままでは島唯一の県立高校がなくなってしまうという危機に直面したため、地域をあげて高校を存続させるための大規模なプロジェクトを行うことになったのです。

プロジェクトでは主に「大崎上島学」「公営塾「神峰学舎」」「教育寮コンパス」の3つの取組を柱とし、大崎海星高校に入学した生徒たちが「ここでしかできない学び」を提供することで、ここで学んでよかったと思えるような環境を整えています。プロジェ

クト開始からもうすぐ10年目となりますが、2022年現在、県外からも学生が集まるようなまさに魅力溢れる学校になりました。当法人のメンバーが本業で運営している公営塾では、「自律した学習者」となることを目的に、学習指導以外にも生徒たちのやりたいことを深掘りする学習やキャリア教育支援なども行っています。また、学外で運営する「ミカタカフェ」は、子どもたちが気軽に立ち寄れる学習スペースとしての役割と、地域住民と子どもたちが偶発的に関わる場所としての役割を持っています。



代表理事の取釜さん(左)、ミカタカフェや公営塾の運営に携わる、まなびのみなとのメンバー勝瀬さん(右)。ミカタカフェが打ち合わせの場所になることもあるそう。



「大崎上島学」の一環で行う大崎上島伝統の權伝馬で島を一周するという取組を行った。コロナ禍になる前までは宮島までこの船を漕いで行ったこともあるそう。

大崎海星高校からはじまった 地域と学びを連携した事業展開

そもそも私たちの団体は、約4年前に立ち上がりました。大崎上島には、当時から地域おこし協力隊のメンバーが多くいました。彼らが卒業した後の受け皿的な機能もつ場所が島内にもあまりなく、卒業後に島を出ていってしまうこともありました。協力隊として魅力化プロジェクトに関わっていたメンバーも、卒業を機に離れてしまうという状況を打開するべく団体を立ち上げたことで、まなびのみなどに所属してもらいながら、高

校を核としたまちづくり」にさらに深く関わってもらえるようになりました。
この団体を立ち上げる少し前の2018年、閣議決定で、学校を中心とした地域づくりの強化が打ち出されました。それまでは大崎海星高校が直面したように、生徒数の減少した高校は統廃合するという方針だったものから、高校を核として地域の機能を強化するような町づくりをしましょう、という方針に転換したので。

この頃から、全国的にも地域での学校支援について潮目が変わり始めます。行政の構造上、地域の小中学校と県立高校とでは管轄が違うため、高校は地域の中でもある意味独立していました。中山間地域や離島の人口減少が問題にならなかつた頃はそれでもよかつたのですが、人口減少が叫ばれ始めた中、地域の最高学府である高校が学力向上のために偏差値を上げれば上げるほど、地域からの人材流出が問題視されていたのです。私たちはそれ以前から、独自でプロジェクトを始めました。国の方針転換も追い風となり、大崎海星高校と同じような状況にある全国の学校関係者からも注目され、学校の視察や学校同士の連携も生まれるようになりました。

「教育の島」から伝え続けるのは 学びを軸にした地域づくり

現在取り組んでいるのは、その大崎海星高校魅力化プロジェクトがきっかけで始めることになった、「全国高校生マイプロジェクトアワード 広島県サミット」です。これは、2021年に認定NPO法人カタリバと連携してはじまりました。全国各地の高校生が探究学習やプロジェクトに取り組み、そのプロセスを通して自分自身への新たな気づきや他者・社会との協働の価値を再発見するというものです。各地での「地域サミット」開

催後に選考で残ると、「全国サミット」に出場できるという日本最大級の学びの祭典です。この運営に併せて、2022年度からはマツダ財団の補助金を活用し、新たに先生同士や生徒同士のコミュニティ作りを取り組んでいます。将来的には先生や生徒だけでなく、地域の魅力的な大人にも積極的に関わっていただき、広島県全体で高校生を応援する土壌や文化を作るコミュニティにしていけたらと思います。

私たちは、「高校の魅力」＝「地域の魅力」だと考えます。特に中山間地域や離島においては、高校の価値を再認識してほしいのです。それは地域をフィールドに学ぶことで、生徒たちの能力が向上するだけでなく地域も変容してくるということ。この島で実際に目の当たりにしたからです。ある方は、高校に関心が高かったけれど一緒に地域活動をするなかで、次はこんな企画はどうか？と提案するまでになりました。高校生たちと活動することで自分達を省みたり、地域の良さを再認識するきっかけになっています。

「教育の島」であるここ大崎上島から全国へ、私たちが思う魅力的な町づくりの方法をこれからも伝えていきます。



大崎海星高校の外観。地域に開かれた学校で、学内にも地域の人が頻繁に出入りする。赴任したての先生は学校内を知らない人が歩く状況に最初は驚くほどだそう。



左/大崎海星高校内にある公営塾「神峰学舎」。放課後になるとここに生徒たちが集まってくる。中/「大崎上島学」の中で行う權伝馬のオール。右/校内を回る取釜さん。普段から学校にはよく出入りしている。

まなびのみなどのお問い合わせ先

【一般社団法人まなびのみなど】

住所：豊田郡大崎上島町中野 1871 番地 1

Mail：info@manabinominato.or.jp



ホームページ

リーダーの取釜さんからひとこと

取組への意義づけになり モチベーションも向上



この表彰は私たちの取組の意義づけになり、一同のモチベーションも高まっています。地域や社会へ価値あることを提供し続けるべく、さらに取組を発展させていきます。

令和4年度
受賞団体紹介



03



安田マルシェ

【メンバー】
鳥井美香さん

安田マルシェで地元
人の流れと笑顔溢れる
コミュニティを作る

未来の
たね賞

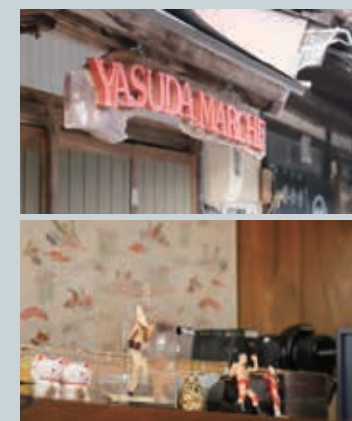
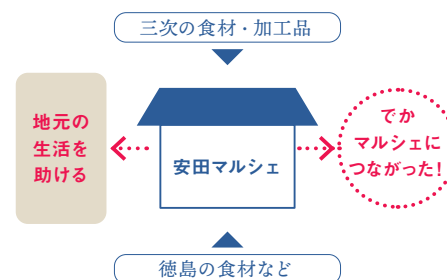


安田マルシェ 三次市

【団体プロフィール】

2020年から三次市吉舎町安田にて、毎月隔週日曜日のマルシェを運営。「花笑カフェ」というカフェも経営している。

安田マルシェ関係図



人口3000人の地域で始めたのは
生活を助けるための小さなマルシェ

私が活動しているのは、三次市吉舎町にある人口約3000人の安田地域です。主な活動は「安田マルシェ」の開催で、月2回、隔週日曜日に開催しています。毎回平均で2、30人の方がきてくださり、安田の方を中心に、買い物だけでなく地域の人同士で集うためのコミュニティの場としても活用していただいています。

マルシェで扱う商品は、地元安田や三次市内の方が出品されるお米や野菜・果物などの農産品のほか、第二の故郷である徳島から仕



鳥井さんの経営する「花笑カフェ」の隣が、安田マルシェのスペース。マルシェの際には、20店舗ほどが出店し食品などを中心にさまざまな商品が並び。

入れた加工品です。「今日はあの人の商品はないん？」との声があれば、次回のために予約をとるなど、なるべくみなさんの要望に答えられるような工夫をしつつ、マルシェ開催日以外はカフェで販売しています。

この「安田マルシェ」がきっかけで、安田自治振興会が主催する「安田でかマルシェ」が2022年5月から開催されるようになりました。こちらは、2019年に廃校になった安田小学校の活用を目的に始まり、これまで2回開催。回を追うごとに集客数も増え、2022年10月30日の第2回には約300人ほどの来場がありました。小さな地域でのマルシェにこれだけの人が集まるのはとても嬉しいことです。

それ以外にも、書道の経験を生かした地元神社の御朱印作成や、ラジオDJの経験を生かした町内行事での司会業などを通して、地域の元気に繋がるような活動を行っています。

2023年から、カフェの一角で行うワークショップにも力を入れ始めました。例えば、わら細作家さんのワークショップでは、安田で出たわらを使ってもらう予定です。講師や参加者と地域のどちらにも、よい循環が生まれればと考えています。



マルシェにならぶ商品には、三次市内のお菓子屋さんの焼き菓子などもあり、地元の方にも好評だという。この辺りではなかなか目にしない徳島の商品も鳥井さんがセレクトして仕入れている。



廃校になった安田小学校が会場になる「安田でかマルシェ」は、今後も年2回開催を予定。鳥井さんの活動に刺激され、同じ吉舎町で別のマルシェも始まった。

**やってみる精神で挑戦した先に
活気ある町ができてゆく**

私は昔から、なんでもまずは断らずにやってみることを大切にしています。自分がしっかり動いていければ、必ず何かはどこかで繋がっていくと確信しています。

徳島時代、私はラジオDJとして音楽番組を持つていたのですが、ある時プロレス番組を持たないか、と話がありました。その時のディレクターが、女性にプロレスを語らせたら面白いと考えたからだと思っています。プロレスの知識がなかった私は引き受けてから猛勉強しました。粘り強くさまざまなレスラーの

方取材して作った番組は約7年続きました。その頃からのご縁のおかげで、2023年10月に旧安田小学校でプロレスイベントを開催することが決まりました。町の人の笑顔と活気づくりができるいいなと思っています。

また、2022年には「ひろしま『ひと・夢』未来塾」を受講。このとき周囲からは「未来塾なんて絶対無理よ」と言われましたが、余計に火がつき、さまざまな学びを得ることができました。事業に活かせる考え方のほか、「並走型」で進めることの大切さを学んだのです。私は現在、一人でカフェもマルシェも運営しています。しかし一人では、できることにも限界があるため、「並走」してくださる方を増やすことが今の課題です。

意見という球を投げ続けても、返ってくるのがそれに対する感想だけだと、やはり一人でこの先続けていくにも課題を感じます。だからこそ、投げた球について別の角度からの具体的なアドバイスや一緒に考えてくれる人を増やしていければ、二人三脚が三人四脚にと、どんどん繋がりが広がっていくのではないかと思います。これからもこのマルシェを通して安田を訪れる人を増やし、この地域に活気を生み出していきたいと思っています。

リーダーの鳥井さんからひとこと

周囲の方の“できる”が
1人で始めた活動の後押しに



周りの方の“できること”が繋がって、活動が広がっていく素晴らしさを強く感じました。これからの安田に人が“わざわざ”集まるコミュニティを作っていきます。

安田マルシェのお問い合わせ先・SNS

【花笑カフェ】

住所：三次市吉舎町安田 1709-1
TEL：090-3220-8736



Instagram



Twitter



カフェは、予約が入れば貸切営業もするとのこと。地元の方の同窓会の会場になったり、家族での食事会に活用したりと、地域に人の流れを生み出している。

地域活動の困難を乗り越える鍵は
軌道修正できる柔軟さ

生まれ育ったこの地に戻ってくるようになったのは20年ほど前のこと。大学進学を機に徳島へ移住し、就職・結婚・子育てを経験しました。その後、両親の通院や畑仕事の手伝いのため実家と徳島の家とを往復する生活を始めました。そんな中、2019年に安田小学校が閉校したことで「この町のために何かしたい」と思うようになったのです。

この地域はこれまで、車で10分走った場所にあるコンビニか、週に1度来る移動販売車以外には、気軽に買い物ができる場所がありませんでした。歩くのが困難なお年寄りや交通手段のない人にとっては、すぐ食べられる物を買うこともできないのです。私はこの状況に危機感を感じ、カフェとマルシェを同時に始めようとしていました。しかし、コロナ禍のためカフェ開業は一旦見合わせ、2020年にマルシェを先に開始。今後オープンするカフェの認知を、ここで広めていくことにしました。

開業までに一番苦労したのは場所選びです。幼い頃から縁のあった元大工さんの家を譲つ



マルシェ開催日には、軒先にテントが出され、この日に合わせて花の寄せ植え体験などのイベントも企画し、買い物だけでなくにぎわいを作り出している。

ていただき、今の場所に決めました。しかしそこに至るまで、工事の見積もりまでした場所が白紙に戻ったり、借りようとした場所の許可が取れなかったりと、いろいろ大変なことがありました。そんな時も「じゃあ次はどうする？」と考えながら、諦めずに探してきました。

何に対しても、自分で「こうしたい」と決めたことが、ダメになるのはよくあること。その時にどれだけ、軌道修正できるアイデアや考え方を持っておくかが、とても大事だと感じます。さまざまな困難に、柔軟に対応したことで今の私があり、マルシェやカフェの開業に繋がりました。



竹の伐採は一人で行うこともできるが、長いものは別の人がロープをかけて引っ張りながら切っていくので大体2人以上で作業を行う。良いものだけを切りすぎると竹林が痩せてしまい、太い竹が育たなくなるため、選別作業が重要となる。

「広島が誇る特産品の「牡蠣」を支えるのは良質な竹材」

私たちは、竹林の竹の切り出しから運搬、販売までを全て自分達で行っています。竹材の購入者のほとんどは牡蠣の養殖業者さんです。養殖用の牡蠣筏には、孟宗竹という竹が使われます。

一般的に牡蠣筏の竹材の寿命は4年ほどと言われていますが、その質によってやはり耐久年数が変わります。質の悪い竹だと1年でだめになりますし、質の良いものは6・7年保つものもあります。筏の中で一部の竹が腐ると沖の方でバラバラになりかねませんから、牡蠣養殖業者の方は竹材がだめになると、その都度新しい竹材を購入し筏を組まなければいけません。竹材が2年長く保つだけでも、購入や組み直しにかかる経費を抑えることができますので、みんな質の良い竹を欲しがるのです。

そのため私たちは選別にもこだわり、本当に質の良いものだけを届けるよう努力しています。竹の良し悪しを判断するには、節の色や太さなど見分ける部分がいくつかあります。最も質が良いと言われるものは、成長がピークに達し根元の色が黄色っぽく変化した



代表の眞鍋さん。竹の選別をし、切り出すものを見分けながらチェーンソーで伐採を進める。

未来のたね賞

竹林整備と再生



中国四国里山整備振興会 世羅郡世羅町

【団体プロフィール】

2014年に発足した、竹林整備などを行う団体。世羅町の竹林を中心に各地で伐採などの整備を行う。

令和4年度
受賞団体紹介



04

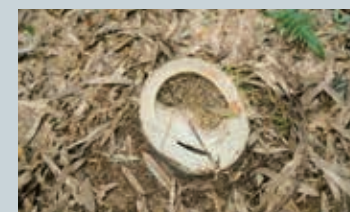
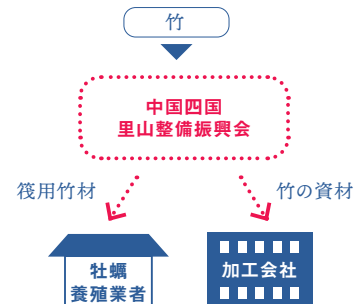


中国四国里山整備振興会

【メンバー】

眞鍋良平さん ほか5名

中国四国里山整備振興会 関係図



ものです。しっかりと選別して納品すると、お客様からは「これは10年は保つかもしれねえ！」といったお褒めの言葉もいただいております。徐々に口コミで私たちの竹材が広まってきました。

主な活動拠点は世羅町です。伐採も竹材の納品先も県内がほとんどですが、依頼があればごく稀に、中国地方の各地や兵庫県西部まで納品に行くこともあります。伐採の依頼としては最近では県内だけでなく島根県の方からの問い合わせもあります。みなさん、整備しきれなくなった竹林に困っておられますから、できる限り対応したいと考えています。



メンバー同士が分担して作業を進める。最年長は○歳で、年齢差はあるが、コミュニケーションをとりながら竹林の状況などを話し合っている。

人材不足により連鎖する課題は竹の加工品開発などで打開する

竹材を販売する業者は年々減っています。事業者の高齢化と後継者不足、採算が取れないなどといった理由でやめてしまう業者が多く、状況は深刻です。昔は伐採とともに竹を販売して収益を得る方法もあったようですが、中国産の筍が国産よりも安く市場に出回るようになった今では、そんな業者も減りました。そのため、事業として成り立たせるには竹材を値上げするしかなくなってしまう、その価格が高騰した皺寄せは牡蠣養殖業者さんに行

くという連鎖が起きているのです。そんな状況を打開するため取り組んでいるのは、竹材の加工品の製造・販売です。主に竹をパウダーにして堆肥を作っています。竹パウダーとは、残用の竹としては商品にできないものや笹の部分などをチップパーと言われる機械で細かく砕きパウダー状にしたものです。これを使っていただいた米農家さんは、田んぼに撒くと米の美味しさの基準となる「食味値」が驚くほど上がると喜んでくださいます。また尾道市の「道の駅クロスロードみつぎ」で販売しているパウダーの小袋は、家庭菜園をされる方にも好評なため、今後も継続的に販売していく予定です。

そのほかにも、山口県で竹を加工して洗剤やタオルを製造している会社さんへの、竹の資材提供と商品の販売を行ったり、竹を活用した国産のメンマを作るプロジェクトにも参加しています。私たちの事業として成り立たせるためにも、残用の竹材の販売以外のものでも価値を作ることに取り組んでいます。

これからも、竹の有効活用を進めることで広島県の牡蠣業界の盛り上げに協力し、竹林の問題そのものの解決にも貢献していきたいと思っています。

リーダーの眞鍋さんからひとこと

認知も広まったこの取組が活動を見つめ直すきっかけに



エントリーや投票促進活動は、私たちの活動の意義を見つめ直すよい機会になりました。多くの人からいただいた応援も励みになり、活動の認知も広がったと感じます。

中国四国里山整備振興会のお問い合わせ先

【中国四国里山整備振興会】

住所：尾道市御調町丸河南 301-1

TEL:0120-329-604



ネットショップ



竹材は、節が黒く真っ直ぐなものを選ぶ。切り出したものは手作業で山からおろし、まとめてトラックに積み上げて運搬する。

偶然見かけた竹の運搬から竹林整備の事業がスタート

私たちの活動の始まりは、代表の眞鍋が2009年に一人で始めた竹の販売でした。当時、眞鍋は会社員として働きながら、収入面などを考慮して別の仕事を探していました。そんななか、仕事で海沿いの地域に行つたあるとき目にしたのは、牡蠣の養殖業者さんが海に竹材を降ろしている姿でした。そのとき眞鍋は、若い頃に竹を切り出すアルバイトをしていたことを思い出し、「これなら自分にもできる」と思って副業で竹材を切り出すア

ルバイトを始めたのです。最初のうちは、眞鍋が一人で竹をノコギリで切つてはとにかく牡蠣業者さんを回つて営業をかけました。どこに行つてもなかなか商談がうまくいかず大変でしたが、あるとき1つの業者さんが購入してくれました。なぜ買ってくれたのかを聞くと、「竹が足りなくて困っているから」と返答が返ってきたのです。そこで竹材の現状を知りました。

当時その養殖業者さん曰く、竹材はいつも決まった卸業者から購入します。竹が足りていないからと他のところを買つたために、別の業者が卸してくれなくなつては困るという懸念もあったそうです。それならば自分が役に立てるかもしれないと思い、本格的に竹材の切り出しや運搬業を始めました。

現在のメンバーは、みんな副業でこの仕事をやっています。代表の眞鍋は運搬業ですし、それ以外には定年退職後に農業をしながら活動する人や、スポーツ選手として活動する傍らで生活費のためにここでアルバイトをするなどさまざまです。週に数日、みんなで集まって竹材の切り出しなどの作業を行います。重労働だからこそ、楽しみながら取り組んでいます。



主な活動を行う場所が複数あるため、二手に分かれて作業を行うことが多い。こちらではチップパーを使って竹をパウダー化する作業を行う。

令和4年度

受賞団体紹介



05



地域QOL研究所

未来の
たね賞

安芸高田SDGsの取組

～未利用資源(耕作放棄地・空き家など)を利用して、みんな笑顔に～



一般社団法人地域 QOL 研究所 安芸高田市

【団体プロフィール】

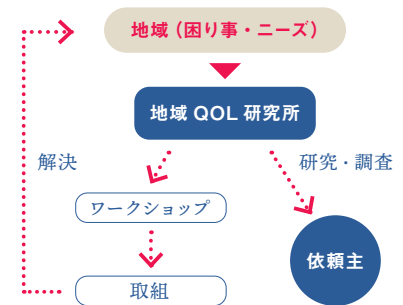
安芸高田市を拠点に活動する、非営利の地域づくりコンサルティング。地域の生活の質の向上を目的とした企画や研究などを行っている。

【メンバー】

代表理事 田村真悠さん

ほか6名

地域 QOL 研究所 関係図



QOLのメンバー。左から、山岸さん、奥田さん、田村さん、福垣さん。

地域のニーズを汲み取り ワークショップで深掘りする

安芸高田市は、美しい自然や歴史のおもかげが残る町としての名所がありますが、空き家や耕作放棄地といった未利用資源もたくさんあります。それらの「資源＝魅力」を掘り起こしながら、地域のQOL(生活の質)に関するニーズに合った企画を運営したり、課題解決のための研究開発を行ったりするのが私たちの主な活動です。

地域のニーズとひとことでも言っても、その種類はもちろん多種多様です。ニーズのヒン

トは、いつも地域の方とのコミュニケーションの中にあります。町の行事で住民同士が集まった時などに、「ここがこうなったらいいと思うんだよね」といった声が上がると、それらを私たちは全てニーズと受け取ります。そして、そこからテーマを掲げたワークショップを開催します。ワークショップでは、テーマに合わせて地域の人だけでなく、専門的な知識を持つ方にも集まってもらい、課題を解決するためのアイデアを出し合っていくのです。これまでに実際に行った活動の例として、「花と歴史街道」という取組があります。安芸高田市内には自然や歴史を感じるさまざまな名所があります。それは、春に咲くカタクリやミツマタ、菖蒲などの花の名所、点在している毛利元就由来の土地、そして江戸時代から現在も残る豪商の庭園などです。この企画については、2021年のさつやま未来博にてオンラインでワークショップを開催し、これらの場所をうまく繋ぎ、なおかつ健康的な生活に生かすべくウォーキングコース作りをするという企画が立ち上がりました。この企画は形になるまでに時間がかかると考えていますので、これから数年かけて取り組んでいくことになりました。



左・右上/安芸高田市内にある、カタクリの群生地は毎年多くの観光客が訪れる。地域住民が協力して自生地や周辺の畑での花栽培などの管理を行う。右下/ワークショップの様子。中/江戸時代から続く豪商のお宅は、メンバーの実家でもある。代々守り継がれた美しい庭園を生かす企画も構想中。



「SDGs 研修センター」となる旧小田東小学校。この施設の活用方法についても、ワークショップを通じて議論を深めている。

私たちの活動の根本にあるのは、安芸高田市を「みんないいね」と言える場所になりたいという想いです。意見の違う人や障がいがある人に対しても、誰もが相手を受け入れ、認め合うことから、地域の元気づくりは始まると思うからです。

現在着手している、安芸高田出身の日本画家・和高節二の原画保存活動については、ワークショップを通して広島市立大学芸術学部の学生たちと一緒に手入れなどを行っています。生まれ育った地で絵を描くことにこだわった

「みんないいね」と言える町へ
今ある資源をさらに活用する



左／「ギャラリーえんがわ」の店内には、QOLの掲示板のような場所があり、ワークショップのお知らせも貼られている。中／代表田村さんの藍染の作品。右／「ギャラリーえんがわ」の外観。

長年興味のあった地域づくり活動は
友人の一言から動き出した

代表理事の田村は、若い頃から里山での活動に興味を持っておりました。電力会社に長年勤めたのち、会社員時代の後半は5年ほどシンクタンクに所属。地域づくりや地域課題の解決に向けた研究・開発などに取り組んでいました。その後2017年から地域づくり活動を本格的に行うようになり、友人も増えてきたこの安芸高田市で活動を開始しました。

そのきっかけとなったのが、現団体の法人化前に立ち上がった「えんがわ創作プロジェクト」です。その名の通り、「ギャラリーえんがわ」という名前のカフェギャラリーを、田村の友人がオープンさせることを機にはじまった活動です。このギャラリーが人の集まる場所になったらいいなという、オーナーのつぶやきを聞いた田村が主導となり、地域を巻き込む企画を作り始めました。田村が育てた藍を使って藍染体験をしたり、カフェの敷地内にピザ窯を作ったりと、現在もさまざまな活動を行っています。

立ち上げた当時はこのプロジェクトに関わる人々に対して、「応援団」という形で接し

画家の、逝去後30年経った今も残る原画を、大切な未利用資源として地域づくりに活かしていきたいと思っています。

2022年には広島県の「元気さとやま応援プロジェクト補助金」をいただくことができ、その補助金で新たに古民家を借りました。空き家問題の解決のため、まずは私たちがここを借りてワークショップを開催し、空き家の活用方法を地域のみんなで考えています。

また、閉校になった小田東小学校の活用について2022年に安芸高田市と協定を結びました。今後はここを「SDGs 研修センター」と名づけ、地域の子どもたちにも参加してもらい、子どもならではの発想も取り入れながらSDGs.について実践的な学びを深める場所にしていくつもりです。古民家とこのセンターを新たな活動拠点とし、引き続き未利用資源を活用した地域づくりをしていきたいと思っています。

そして将来的には、安芸高田市で実施した取組を一つのモデルに、今後さらに中山間地域での活動の幅を広げる予定です。地域のニーズをつかみ、ワークショップで住民と一緒に解決策を見つけていくという手法で、元気な里山作りを行っていきます。

リーダーの田村さんからひとこと

投票での評価と知事との対談が
次に繋がるステップに



5年間の継続した取組が、一般の方の投票により評価されたのは大変光栄です。結果を踏まえて行った湯崎知事との対談も、次につながるよい機会となりました。

地域QOL研究所のお問い合わせ先

【一般社団法人地域QOL研究所】

住所：安芸高田市向原町坂 1689 - 3

TEL：050-5855-0608



ホームページ



新たな活動拠点として借りた古民家は、その敷地内を芸備線が走るという珍しい場所。芸備線の今後について意見をかわすワークショップも行っており、仲間たちと考えるきっかけとなっている。

でもらっていました。何か企画の旗をあげる時に応援してくれる人は、普段から顔の見える関係の方が良いと思ったからです。

そして、より幅広く地域課題の研究や地域づくり活動ができるようにと、専門性のあるメンバー3人と2018年に法人を設立。メンバーはそれぞれ、農業や別の事業と並行しながら、団体としての活動を行っています。プロジェクトを機に集まったメンバーですが、今では安芸高田市の未利用資源活用にかかす取組だけでなく、他の団体へのアドバイスや人材の紹介などもできるようになりました。



菜の花の摘み取りや洗浄なども手作業で行っている。商品は10g、23g、40g（瓶入りのもの）の3サイズあり、ネットショップや豊栄町内で販売している。

令和3年度
未来の
たね賞

菜の花くらぶ 東広島市豊栄町

【団体プロフィール】

2021年から、豊栄地域の元地域おこし協力隊の田野実温代さんを中心に、広島大学の学生や地域と協働して活動する団体。町内のアブラナ科野菜の菜の花で「菜の花 Salad Salt」を製造する。



地域の方が育てた菜の花を丁寧に乾燥させて作った「菜の花 Salad Salt」を、2022年から発売された広島大学創立75周年記念弁当の材料に採用していただき、業務用の出荷も始まりました。グッドアワードにエントリーしたおかげで、自分達が想像していた以上に気付けられました。チームのモチベーションアップにも繋がっています。



育てた木を森に返すことで、木が地盤を強くし災害の危険性を減らすこともできるそう。代表の三村さんは「これからもこの活動を通して人々と防災について考える取組にしていきたい」と話す。

令和3年度
未来の
たね賞

一般社団法人 My Japan 広島県内全域

【団体プロフィール】

日本文化や伝統を、世代を越えて継承することを目的に2018年設立。二葉山の整備活動や土砂災害をきっかけに日本の森林保全に課題を感じ、贈ろう森プロジェクトを生み出す。



贈ろう森プロジェクトでは、森林内の苗木を土や苔玉とあわせて「小さな森」をつくるワークショップを行います。参加者が里親として半年〜1年ほど大切に育てた苗木は、また木を必要とする所へ贈られます。こうして、人と森とを繋ぐ活動に取り組んでいます。受賞後、商業施設でのワークショップの開催や企業との連携が生まれ、行政からの注目度も高まりました。今後は全国展開を目指しています。



100プロ 北広島町

令和3年度
さとやま
未来大賞

【団体プロフィール】

2018年に、北広島町立新庄小学校の保護者たちで立ち上げた団体。当時の児童数は63名で、その翌年の旧大朝町の出生数が1桁だったことから、地域をあげて活気づけに取組み、2028年に児童数を100人にすることを目標に活動中。大朝の写真を使ったカレンダー制作や女子会など、チームに分かれて企画・実施している。



チームのメンバーは、現在約60名。「自然体験プロジェクト」では、子どもの教育を軸としながら、ドラム缶風呂を薪で沸かすなどの体験の場を作っている。



結婚などで移住してきた女性をサポートする「女子会プロジェクト」や「エコマーケット」、「大朝自慢の写真展」など現在も各チームの企画が進行中。



<動画はこちらから>

「さとやま未来大賞」の副賞として制作された、100プロの紹介動画です。こちらからご覧ください。

令和3年度 受賞団体も 頑張っています!

令和3年度に受賞した5団体の、受賞後の変化について伺いました。「ひろしま里山グッドアワード」の公式HP(※P29参照)では、エントリー時の詳しい活動内容が掲載されていますので合わせてご覧ください。

昨年の大賞受賞をきっかけに 優良事例として総務省から表彰

昨年いただいた大賞をきっかけに、地域住民の方への認知度がより高まり、応援の声を多くいただくようになりました。アワードへのエントリー、投票促進、そして受賞という取組を通して、私たち自身が目標や目的を再確認でき、チームの結束力もより強まったと感じております。

そして2022年9月には、ありがたいことに「令和4年度過疎地域持続的発展優良事

例表彰」において「全国過疎地域連盟会長賞」をいただきました。これは、平成2年から総務省が毎年行っている、全国の過疎地域の持続的発展のため、創意工夫によって地域の活性化が図られている優良事例を表彰するものです。10月には熊本県で行われた表彰式に出席し、代表の大内は活動事例のプレゼンも行いました。

これからも、地域の方がいきいきするきっかけとなるような活動を行うことで、関係人口増加に貢献し、児童数100人の実現に向けて活動を続けていきます。



ひろしま里山グッドアワード 公式ホームページのご紹介

つくろう！
みんなと
GOODな
さとやま！

「ひろしま里山グッドアワード」の公式ホームページでは、最新の受賞団体の活動だけでなく、過去の受賞団体の事例についても掲載しています。大賞を受賞した団体には副賞としてプロモーション動画も制作されておりますので、そちらもぜひご覧ください。エントリーに興味がある方もぜひ参考にしてみてください。



公式
HPは
こちら



あなたもGOODな活動で、 エントリーしてみませんか？

広島県のホームページや「ひろしま里山グッドアワード」のFacebookでもエントリーに関する情報を公開していきますので、ぜひご確認ください。
皆様のエントリー、お待ちしております！

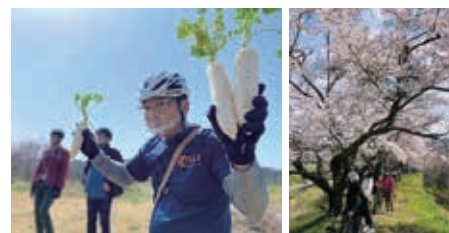
公式
Facebook
はこちら



「ひろしま里山グッドアワード」に関するお問合せ

広島県地域政策局 中山間地域振興課

■住所：〒730-8511 広島市中区基町10番52号
■電話：082-513-2632 ■FAX：082-224-1977



バスや自転車を「移動する仕組み」として捉え、地域のにぎわい作りに生かしている。堀田社長は「今後は大朝を「山側のサイクリングの聖地」にしたい」と意気込む。

2021年にスタートした「大朝モビリティイニシアチブ」は、バスターミナルである「大朝駅」の無人化が検討されたことをきっかけに誕生した施設です。ここを拠点にE-BIKEのレンタサイクルや観光ガイドツアーを実施し、受賞後の2022年度は月に約30〜50組がツアーやレンタサイクルを利用してくださいました。この体験を目的として町を訪れる方も増えてきています。

令和3年度
未来の
たね賞

有限会社 大朝交通 北広島町

【団体プロフィール】

北広島町大朝で昭和46年に創業した交通会社。貸切バスやタクシー、町内を中心とした路線バスの運行で町を支える。E-BIKEでの観光ツアーの企画・運営もしている。

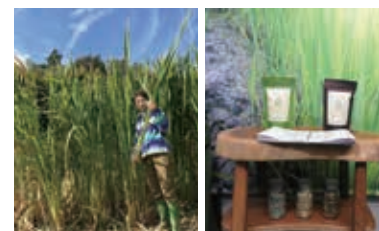


令和3年度
未来の
たね賞

まこもプロジェクト 北広島町豊平地区・安芸高田市 甲田地区・竹原市田万里地区

【団体プロフィール】

日本で古くから親しまれてきたまこもの栽培を行い、加工、商品開発、販売までを手がける。作業は会員とともに、都市部の消費者が里山に関心をもつきっかけを作っている。



現在会員は累計160名にまで拡大。しかし休耕田を蘇らせるためのまこも栽培にはさらに労働力が必要となるため、農業体験用と栽培用の田んぼを分けるなども検討中。

一次審査通過後の一般投票が全国区だったため、県外の方からの問い合わせやまこもの苗の注文が増えました。関西から実際に農作業の体験に来られる方もいっしょに、認知度の高まりを実感しました。また、私たちの活動についてのテレビ放映をきっかけに、一般の方から休耕田と古民家を活用してほしいとの依頼があり、メンバーと地域を繋ぐ場所として新たな活動拠点を持つことができました。



Hiroshima Satoyama Good Award

